

総合学問としての考古学

松本 剛（南イリノイ大学人類学科）

94年に最初のシカン展が開かれた頃、私は千葉にある大学で言語学を学んでいました。ところが理論言語学の諸分野に触れるうちに、目に見えない言語とは違う、「手に取って触ることの出来る何か」を次第に追い求めるようになっていったのです。その結果、行き着いたのが考古学でした。「モノの研究」に魅せられた私は、様々な考古展覧会を見て回りました。そんな中、上野で見たシカン展は、その学際的なアプローチにより、それまでの私の考古学に対するイメージを一新しただけでなく、研究成果の見せ方の上手さにおいて他とは明らかに一線を画すものでした。これが、その発掘調査を指揮し、展覧会を監修した現在の我が師・島田泉との出会いでした。

彼の下でアンデス考古学を学ぶ決意をした私は、留学資金を貯えるためにIT関連の仕事に就きました。夏休みはもちろん、正月休みもない過酷な勤務状況に精神的に追い詰められたり、周囲の様々な圧力から留学なんか無理だ！と自暴自棄になったりしたこともありましたが、“石の上にも三年”の諺どおり、なんとか三年間勤め上げ、98年の夏にアメリカに渡りました。

学部の四年次に編入し、島田教授が教える『考古学入門』のクラスに潜り込むことに成功した私は、なんとか教授に認められようと、必死で論文を書きました。そうした努力が少しずつ報われ、翌年の夏にはシカン文化学術調査団の一員として加わることを許されました。夢にまで見たペルーでの発掘です。土器片が一枚出てきただけでも嬉しかった。調査中はあまりの興奮で眠れない夜が続きました。以来、5度の発掘シーズンを教授のもとで過ごすこととなります。

それからの10年の道程は、今思い返せば、大変険しいものでした。途中、諸事情による三年間の休学、再就職、結婚、第一子誕生を経ての復学など、ありとあらゆる困難を経験しました。それは学業においても同様でした。特に、修士課程（日本で言う博士前期過程）の一年目は地獄でした。それまでの自分を完全否定されるような挫折感と言えばよいでしょうか。量・質ともに、期待されることが、私の想像をはるかに超えるレベルだったのです。一年間に出された課題論文は、自分の背丈を越えるほどでした。

しかし、このような困難と挫折の連続は、いつの間にか私を強くしました。「ちょっと無理かな」と思うことに挑戦することの大切さ。寄り道が与えてくれた人生の幅。そして、背負うものが大きければ大きいほど、湧き上がるこの勇氣。

かつての私と同じ夢を見ている若い人たちに言いたいことが一つだけあります。北米では考古学は人類学に属する。つまり、「人間とは何か」という壮大な問いに果敢に挑む、果てしない試みです。また、机上での実力のみならず、野外調査を乗り切る体力、仲間たちとの共同生活を潤滑にする社交性、（海外で調査を行うなら）外国での暮らしにも耐えられる適応性や語学力などが要求される総合学問です。だから、目の前にあることを、たとえそれが考古学とは関係のないように見えることであっても、全身全霊で受け止め、思い切りやったらいい。背負えるものはすべて背負ったらいい。すべては考古学に通じるはずです。

(1,300字)